

棲み分けができない状態になりました。

そうした中で、多くの人が関心を寄せるのは、野生動物それ自体もありますが、それを守り育てている自然環境の保全です。生物学的な自然環境をどう守るかという気持ちがある人になって、野生動物を考える人が多いためです。野生動物が棲んでいる環境を劣化させ、それによって種としての存続が危ぶまれるものさえ出ていることへの反省が強くなっています。

例えば、ゲームハンティングを否定する人はもちろんのこと、肯定する人でも大量に投棄された鉛玉によって狩猟対象でない鳥まで死んでしまうことに、危惧を抱いています。ルールを決めたハンティングはよいが、使用する鉛玉で環境を汚染することがあれば、それは許せないと考える人が増えています。

このように環境に関する情報が増えれば増えるほど、野生動物と人との関係性を考える視点が増えていきます。

3 二十一世紀の人と動物の関係

① 具体的解決方法の提示を

人と動物のあまりにも悲惨な関係を見た人は、一切動物を飼うことはやめる、あるいは動物を利用するのをやめたいと思ったりもありません。現実が厳しければ厳しいほど、そう思う人が増えるかもしれません。それは成熟した社会の考え方ではありません。それは問題を逃げてに過ぎません。

動物との関係は隣人や友人との関係に似た

面があります。友達にしろ隣人にしろ、関係を深めれば深めるほど快適なことばかりではなく、トラブルが増えることがあります。快適なことと不快なことは、いかなる関係性においても共存しております。隣人との関係性においても、近い所に住んでいるため、隣人の生活様式や臭い・騒音が気になります。たとえ空間的に離れている友人であっても、学校や職場などでかかわりを持っており、その関係性において不快なこともあれば不愉快なこともあります。もし不愉快さから逃げようとするならば、一番簡単な方法は関係性を断つ、すなわち付き合いをやめることです。しかし、このような解決方法はもともと未熟な解決方法といえます。虫歯が痛んだからといって、抜歯してしまうようなものです。生きる苦しみから逃れるために、自殺を図るようなものです。

動物との関係性において多くの問題があると感じた世紀が二十世紀であったとするならば、二十一世紀は具体的な解決方法を提案すべき世紀です。現状を一步でも二歩でも前へ、良い方向へ変えようと努力する。もしだめなら元へ戻すという柔軟さを持つて行動する世紀が始まったと私は思います。

② 動物園のあり方

動物園における動物と人のあり方が注目されています。動物園には、本来は身近に触れたい、見ることでできない動物たちが飼育されていますが、動物の虐待を招く恐れがある動物園のような施設は廃止すべきであると主張する人がいます。しかし動物園には、教育的な

効果や安らぎの効果など様々な社会的意義があります。また絶滅の危機に瀕している動物の系統保存の役割も動物園に望まれています。

しかし、こうした社会的意義があるからといって、動物園ではどんな動物の飼育方をしても良いことにはなりません。多くの動物園では、飼育されている動物の生活の質を高めようと努力しています。二十一世紀の動物園は、人と動物の両者にとってもっと楽しくもっと快適な施設になるために着実に進んでいくべきだと、多くの人が認識しつつあるのではないのでしょうか。

③ 都市生活とペット

都市生活での人と動物の主たる関係は、飼い主とペットですが、都市は集約された空間であるため、いくつもの問題が発生します。

例えば集合住宅でペットを飼うこともそうですが、一番の象徴が「地域猫」(注1)の存在です。地域猫はペットと野生動物との中間的な位置付けの動物であると考えられます。これに私たちがどう対応するか、多くの人たちにとっては悩ましいことです。地域猫がいることで安らぎを感じる人もいれば、地域猫に自分の庭が荒らされる人もいます。また、猫は「小さなハンター」であるため希少な小動物をハンティングしてしまうこともあります。このような問題があるため、地域猫をなくしてしまいたいと考える人たちも少なくありません。このように地域猫一つをとっていても全く別の考え方を人間が持っています。地域猫と人はどのような折り合いをつけていくのか、二十一世紀的解決方法はないのか、

(注1) 37ページ4②「地域猫の誕生」参照

多くの人が悩んでいます。地域猫をなくしてしまえば問題がなくなる。これが一番単純な方法ですが、このような解決方法で果たして良いのかというのが二十一世紀の課題です。

横浜では、不幸な地域猫を増やさないルールづくりを粘り強く話し合い、地域猫の存在を是とする人と非とする人が関係性をもつたことは素晴らしいことだと思います。これこそ二十一世紀的な人と動物のかかわりを考える基本になっている例です。

④ 動物とのふれあい

また都市空間はどうしても自然から切り離されてしまいます。樹木や草花が都市に配置されれば、それで自然が戻ったわけではありません。都市的な自然をどのように配置するか、自治体ごとの考えがあつてよいと思いますが、植物とのふれあいはある程度考慮されるところでも、動物とのふれあいはあまり考慮されないのが普通です。

動物とのふれあいは、ペットと暮らせる都市づくりを考慮することによって、ある程度達成されると私は考えています。都会だからこそ必要とされる動物とのふれあいは、野鳥のような鳥類だけでなく、犬や猫のような哺乳動物も考慮されるべきです。

人工的な環境では得られない安らぎが、動物とのふれあいから得られるものであり、これを広義のアニマルセラピーと考えるなら、積極的に取り上げるべき都市生活の中の動物との関係です。このようなことが二十一世紀にはもつと盛んになるでしょうし、また促

進する必要があります。

4 成熟社会——多様性を認め合う議論を

① 歴史と文化に規定された人と動物の関係

日本人と動物の関係だけを考えてみても非常に多様ですが、世界的にはもつと多様です。なぜなら人と動物の関係性は、歴史と文化に強く規定されているからです。同じ国でも時代が違えばずいぶん違います。もちろん違う国であれば文化も違います。

日本では「キツネ狩り」については残酷であると考える人が大半ですが、動物愛護が盛んなイギリスで長い間許されてきた伝統行事でした。スペインの闘牛もそうです。日本人には信じられないことですが、オーストラリアではカンガルーを殺して様々な形で利用しているにもかかわらず、オーストラリア人の多くは問題と感じていません。しかし、彼らから見ると、日本人がクジラを食用にするのは信じられないことです。このように文化と歴史の違いによって、動物に対する感じ方が違うことを多くの人は知っています。

ここで強調したいのは、同じ日本人でありながら、しかも二十一世紀初頭という全く同じ時代に生きているにもかかわらず、人によって考え方がかなり異なるという状況が日本に存在するということです。人と動物の関係については、その人の個人史、つまり個人の歴史が違うことによっても異なるということです。

動物と一緒に暮らしてきた経験がある人ほど動物と一緒に暮らすことを望むというデー

タがあります。また親が動物を嫌いな子どもは、その子が成長してもあまり動物が好きにならないという統計もあります。私たちは自分個人の歴史に規定されているのです。

② 成熟社会は多様性を認め合うところから

私が子どもであつた頃、すなわち終戦後から昭和三十年代までは、お年寄りから子どもまで同じ流行歌を口ずさんでおり、価値観の共有があつたわけですが、今では全くありません。こういう変化の激しい時代にあつては、人と動物の関係も万人が同じ価値観を共有するということは困難です。

したがって、私たちは「人によって考え方が違う」ことを前提として生きていかねばなりません。違いがあることを認め合うところから始めなければ、成熟した論議はできません。考え方の違う人たちが、相手の考え方を尊重しながらどこまで歩み寄れるのかということを考えてみるべきでしょう。実際にそれを実行に移す中で、私たちがもしかすると変わることもあるかもしれないし、変わらないかもしれません。それでいいのです。

地域猫にしろ、集合住宅でのペットの飼育にしろ、それらの問題を解決するための前提においても同じことがいえます。違う考えがあることを認めて、それを尊重しながらどこまでより良いものをつくれるかの話し合いができる時代になったのです。この点が、二十世紀にくらべて二十一世紀のもつとも優れた点であると思います。

△ヒトと動物の関係学会会長・東京大学農学部部長▽